

◆全学部・全学科◆

(六〇分)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

表現ということは、非常に初歩的な、たとえば、水が飲みたいと言って、そのコップの方を指さすということでも、もう始まっているとも言えるわけですが、第一に、自分の内部に動いていること、つまり、自分そのものに気づくということ。それから、第二に、それを他者に手渡そうとすること、つまり、他者に架橋する、橋を架けるという行為であるというふうに言つてよいように思うのです。

〔中略〕表出という段階は無自覚でありますから、外に表れたものを理解してくれる、あるいは受けとってくれる他者がいる場では、何かが相手と自分の間につながっていつて、あるいはとけ合うという感じが強いかも知れませんが、そういうことが成り立ち得る。しかし、それがわかってもらえないという場合には、他者との間は断ち切られて、絶望感、あるいは孤立感だけが残ります。

しかし、自分の中に動いているものに、はっきり気づいている場合には、それが表出されたものを他者がわからないと言ったときにも、単に孤立感の中に閉じこもることはない。その動いたものを、ではどのようにしたならば、他者に対してわかるようにできるだろうかという努力が、そこで起こり得るわけだ。わたしがことばをしゃべり始めたときに起こったことは、そういうことでした。断片的なことばを発しても、それだけでは、ただ感覚的な何かであつて、非常に感受性のよい人には、何かが伝わるのですけれども、一般的に言えば、何を言っているのかわからない。何を言っているのかかわらないと言われたときに、ある絶望感はもちろんあつたけれども、と同時に、他者に対して自分が、どのようにしなければつながらないか、どのようにして橋を架けなければならぬのかということに対する行為が始まった。自分の中に動いているものを、どのようなことばを選び、どのように組み合わせ、どのように発声したときに初めてことばとして他者に伝わり得るかが探られ始めたわけで、これが、表現ということの努力の始まりだろうと思うのです。

たとえば、絵をかくときに、ただ自分のイメージを描くといういわば幼児の段階から、次に、ものを観察してそれをかくということが課せられる段階があるわけですが、客観的に、存在するものを描くということは、他者と自分との両者にとって、共通に認識し得る形を見つける作業として重要なのだとわたしには思われるのです。踊り、あるいは演技にしても、自分の中で動いているイメージなり感情なりを、外にフンシュツさせるという意味での行為だけにとどまらず、たとえばパントマイムとか、物まねと言われる模写行為が必ずまじってくる。そういう一つの土台を通して、他者との間に、共通に了解し得る何かを表す形というものを、自分自分が見つけ出してくるということでしょう。

もちろん、それを学んだからといって、それが自分を表現するということにはならない。それを、どのように組み合わせ、どのように変形したときに、自分の内部に動いているものとびつたりするか探り、そして、さらに、それを他者の目の前にさし出したときに、他者が了解できるかどうかを、みずからの中で、手応えを持って成立させるという作業は、ひとりひとりのきわめて独自な内密な作業であつて、人がそれに対して、⁽²⁾ケイケイに教えるなどということのできないことだ、とわたしには思われる。

それは、人が、人として他者の前に存在する仕方を見つけることだからです。表現活動は、よく、〔中略〕音楽・体育等の芸術形式における学習であるとか、あるいは学校における学芸会とか文化祭とかいったような文化的な行事などと結びつけて考えられやすいし、そのことによって、学校生活や学校の機能が活

性化してくるためのシゲキ物のように見られる場合が多いのだけれども、本来、人間の最も根源的な、それが成り立つことによって、人は人間になるというカテゴリーとしてわたしは考えたい。ですからそれは、あらゆる授業すなわち学習の土台なのであって、これは、一つ一つの科目の中で探られなければならないと同時に、それらの枠を越えた探り方をされなければならないと思うのです。

たとえば、子どもにとって、歌うということは、当然激しい感動が動いてこなければ本質的に成り立たないことであって、それが成り立つときには、必ずコキウウが変わるし、からだは動く。また歌に歌詞があるとすれば、その歌詞の理解とつながらなければ、歌うということが成り立つはずがない。つまりは、国語、音楽、体育というような一つ一つ独立した科目ではなくて、それらに共通する、からだどころ、もう少し表現活動に近づけて言えば想像力の生き生きとした全体的な働きが喚起してくるという作業によって、初めて、歌は歌になり、踊りは踊りになるのであって、それを子どもの全身にひき起こすために、分化した一つ一つの科目を学ぶのではなく、それらを、子どもの想像力を喚起するための一つの入り口、きっかけとしてのみ考えるという態度が、根本的に必要なのではないかと考えるわけです。

(竹内敏晴「教師のためのからだ」とのことば考」による)

問一 二重傍線部①・②の本文中での意味として最も適切なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ① 非常に感受性のよい
- ① 他人と比べて繊細な
② 察知する能力の高い
③ 内面性がとても豊かな
④ かなり影響されやすい

問二 傍線部a「それが表出されたものを他者がわからないと言ったときにも、単に孤立感の中に閉じこめることはない。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ② 内密な
- ② ① 頭や心の中で行われる
② うしろめたく隠したい
③ 他者を意識しない
④ 繰り返される濃密な

3

- ① 人間の内側にあるものは、誰もが正確には言語化できないという共通認識があるから。
② 自分の中でのイメージなり感情は人間の最も根源的なものだという確信が生じるから。
③ 相手と自分との間で何かがつながっている、あるいはとけ合っている感じがあるから。
④ 自分の中で動いたものをなんとか伝えようとする、他者を意識した行為が始まるから。

問三 傍線部b「ものを観察してそれをかくということが課せられる段階」とあるが、筆者はそれをどのようなものと考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

凝るという言葉がある。何事にも一つものに深く執着して、その極限までつきつめねば気のすまないの言うのであろう。着物でも、食物でも、男女の仲でも、道楽という言葉には何となく、暢びやかな雰囲気があるが、凝るとなると、容易に真似も出来ないかわりに、一種言いようのないやらしさもつきまとう感じがする。

私は道楽をするほど、大嫌いな気分も持っていないし、凝ることなどにはなおさら縁がない。凡そ貪欲性だと、自分で味気ながってこれまでの生涯を過して来たが、凝るという気質については、「源氏物語」の中で、主人公の光源氏の口を借りて、何度も趣味嗜好が性格を偏よらせないように戒めている。前に源融の件にも書いたけれども、これは一面では中期平安朝貴族の中庸田舎のうちに美や徳を見出そうとした習性の現われでもあろうし、また作者自身のうちにあった調和への希求であつたかも知れない。

光源氏のライバル役にまわって、いつも損な鑑を引くワキ役の頭の中將(當時は内大臣)が娘を教訓する時に、源氏の子女教育の要諦を次のように説明している。

太政大臣(光源氏)が将来后に念願して大切にしていられる姫君に常に教えていられるのは、すべてのことに理解を行きわたらせた上で、才走って見えるような風には、すまい。さりとて、何につけてもたとどしくおぼつかないということがあつてはならないというので、万事ゆつたりしたうちに秩序を保つことを第一にしていられるのだ。それはそうに違いないが、人は心々、する事にしても、自分でこの方と思って動く方向はあるものだから、成長されれば、自然にそれ自身の性格が現れて来るだろう。この姫君が大きくなられて、宮仕えに出られる時の様子こそ今からたのしみだ。

終の部分は、頭の中將の源氏の女子教育に対する批判で、彼自身の主角のある性格を同時に語っている面白い言葉である。
言い換えれば、同じ最高貴族のうちでも、頭の中將の方は、出世欲も権力意識も強く(もちろん物語の調和を破るほど強くはない)現実的であり、粗野であると言えるし、光源氏の方は、そうした現実のいやらしさや強引さを全く感じさせない優雅な諧調によって、人々の心を惹きつけ、現実的な頭の中將をどううしても勝たせないようにしてしまう。
女は一つのこと執し、一つのことばかり優れてはいけない、全部として調和のとれているのが理想の女性なのだという風に源氏は他の個所でもいつている。

「源氏物語」の作者自身も果してそう思っていたものであろうか。

彼女が上東門院に仕えるようになったのは、恐らくそのXに秀でていたのが原因ではなかったか。いかに、才女の輩出した王朝最盛期といっても、紫式部のように漢籍や仏典を読みこなし、それを読むだけでなく深く理解していた女性は、数えるほどであつたろうと思う。今度、「源氏物語」を口語訳するについて、私はその陰にかくされている教養の予想していたよりも遥かに底深いのにあらためて驚かされもし、恐ろしくも思った。

「漢字の本などをお説みになるから、奥さまはお仕合わせになれないのよ」と侍女に陰口を言われたことが「紫式部日記」には書かれているが、そうしたことが、宮中に入ったとき「一」という字を知らない顔をしていた」とか「上東門院に白氏文集を教えるにも他人の見ぬ時を選んだ」とか書きつづらせる結果になったのであろう。

当時、膨大な知識を女の心身に貯えているのは、たしかに幸いとは言えないことに違いなかった。
女はただ素直で、なだらかに、男に逆らわず、すべてに中庸の美と徳を保っているのがよいと思つたのは、恐らく作者自身の重い荷を背負つた心の呻きであつたかも知れない。

「源氏物語」の中でも作者はそういう中庸の美の代表者として、紫の上という女性を描き出している。ある時代、「源氏物語」は「紫の物語」とも言われたほどで、紫の上はその誕生が描かれていないだけで、少女期から死に至るまで、「源氏物語」正篇の全部に光源氏から最も愛され、尊敬される女性として描

かれています。

紫の上の美しさをほめたたえる言葉は、恐らく光源氏への賛仰と同じぐらいに数多く繰り返され、いつも他のそれぞれの特徴のある女君の誰よりも美しく魅力的であると書かれている。

彼女は唯、美貌であるだけでなく、賢く、情が深く、心がよく行届いて、裁縫や染色の技術まで見事にやっける申し分のない主婦である。少々嫉妬深いのが欠点であるが、そのことが光源氏のような色好みの男にとっては、別の魅力にもなり変って行く。つまり、すべてにおいて、中庸を得た確のない珠のような女が紫の上なのであろうが、それなら、紫の上が「源氏物語」の女主人公の座にあるかという問には私は否と答えたい。それは彼女が終始中庸の徳を心身から離さないように描かれているためで、光源氏が育て上げた完全な女として並べるには申し分ないが、ドラマの主人公にはなり得ないのである。

その点、女の生き方に中庸の徳を教えながら、作者は皮肉にも、藤壺の中宮や六条の御息所のようなこの上なく高貴で優雅なべき女性の心に、無惨な傷を与えることによって、ゆるやかな静かな時の流れを基調とするこの長篇に、鋭い痛みや生々しい恐怖をきざみこんだ。

それは決して、通人の凝った趣味でも、貴族の大らかな道楽気でもない。唯も隠れもない物語の作者の正真正正の声なのである。

(岡地文子「源氏物語私見」による)

(注)

- 1 源融^{みなもとのみ} 平安時代前期の公卿、歌人(八二二年～八九五年)。嵯峨天皇の皇子で、光源氏のモデルの一人とされる。
- 2 上東門院^{じやうとうもんいん} 藤原道長の娘、彰子(九八八年～一〇七四年)の院号。一条天皇の中宮で、後一条、後朱雀天皇の母。
- 3 白氏文集^{はくし文集} 中国、中唐の詩人白居易(七七二年～八四六年)の詩文集。
- 4 正篇^{せいへん} 源氏物語、全五十四帖のうち、光源氏を主人公とする巻(桐壺から幻まで)を指す。

問一 傍線部(1)～(5)の漢字の読みを、ひらがな・現代かなづかいで記述問題解答用紙に記しなさい。

① 大様な

[6]

- | | |
|---|---------|
| ① | 大胆な |
| ② | 包容力のある |
| ③ | 活発な |
| ④ | ゆったりとした |

問二 二重傍線部①～④の本文中での意味として最も適切なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

② 圭角^{けいかく}のある

[7]

- | | |
|---|--------|
| ① | 裏表のある |
| ② | とげのある |
| ③ | 機転の利く |
| ④ | 威圧感のある |

③ 粗野である

[8]

- | | |
|---|-----------|
| ① | 挙措にゆとりがない |
| ② | 所作に新鮮味がない |
| ③ | 言動が穏やかでない |
| ④ | 容姿が美麗でない |

④ 輩出した

9

- ① 次々と現れた
② 能力を発揮した
③ 頭角を現した
④ 作品を発表した

問三

X

に入る言葉を空欄以前の本文中から五字で抜き出して、記述問題解答用紙に記しなさい。

問四

傍線部 a 「作者自身の重い荷を背負った心の呻き」とあるが、「重い荷を背負った」とは紫式部自身のどのような状態を指すか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

10

- ① 人付き合いがあまり得意でない性格であること。
② 女性ながらに膨大な知識と教養を備えていること。
③ 上東門院に白氏文集を教える立場であること。
④ 中庸の美と徳を保った生き方に固執していること。

問五

傍線部 b 「作者はそういう中庸の美の代表者として、紫の上という女性を描き出している」とあるが、本文中では、紫式部が紫の上をどのような女性性として描いていると述べているか。その説明として適切でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

11

- ① 理解が隅々まで行きわたっており、未熟な点や心もとい点もなく、才走って見える人物。
② 美しさ、聡明さ、愛情の深さを兼ね備え、その上、裁縫や染色の技能まで合わせ持つ申し分のない主婦。
③ すべてにおいて過不足なく優れ、調和の取れた女性であり、傷も曇りもない美しい宝石のような存在。
④ 他のどの女君より美しく魅力的で、少女期から死に至るまで、光源氏に最も愛され尊敬された女性。

問六

傍線部 c 「紫の上が『源氏物語』の女主人公の座にあるかという間には私は否と答えたい。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 光源氏が育て上げた完全な女として並べるには申し分ないが、少々嫉妬深いという欠点を持っているから。
② 特徴的に描かれた女性が多くなり、紫の上だけが特筆するべき美徳を持っているわけではないから。
③ 藤壺の中宮や六条の御息所ほどの高貴さや優雅さを持ち合わせず、終始中庸から外れることがないから。
④ 中庸から外れることのない紫の上の人生は、鋭い痛みや生々しい恐怖と結びつきにくいから。

問七

傍線部 d 「嘘も隠れもない物語の作者の正真の声」とあるが、本文中で述べられている「作者の正真の声」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① 自らが得ることのできない女性の幸せを体現する人物として、紫の上という女性の人生を余すことなく描ききりたい。
② 女性は、素直で男性に従順であり、中庸の美徳を保つことによってのみ幸せを得られるということを、強く訴えたい。

問 6 図 1 において、血糖濃度が 600 [mg/100mL] のときのグルコースのろ過量は、 600 [mg/分] である。このことから、1 分間につくられる原尿量として最も適当なものを、次の①～⑤の中から 1 つ選びなさい。 25

- ① 1.0mL ② 6.0mL ③ 10mL ④ 60mL ⑤ 100mL

- ③ 当時の女性の生き方に求められた中庸から外れ、無惨な傷を負うような女性の人生こそ、劇的であり描く意味がある。
- ④ 通人好みの平安朝貴族たちの趣味にかなった、多様な女性の生き方を描くことに、物語執筆の醍醐味がある。